

「無言の問い」

竹林 真耶

私は結婚するまでの数年間、滋賀県の保育所に勤めており、そのうちの2年間、重度の自閉症の子どもさんの担任をしていました。

一口に自閉症と言っても、その症状はいろいろありますが、その子は同じ所にじっとしていることが出来ず、とにかく常に動き回っている子でした。例えば、運動能力はあるので、園庭で自由に走り回っている時は他の子と何ら変わらないのですが、2分と椅子に座っていることができなかつたので、運動会の時などヨーイドンで走り出す時は、一列に並んで待つということが出来ませんでした。

ある日お母さんが、「いつでも家を飛び出して走って行ってしまおう子なので、車に轢かれ^ひないかと心配で、追い掛けては連れ戻していましたが、ある日ふと、『このまま追い掛けて行かなければいい』という想いがよぎったことがありました」と話してくださったことがあります。その時私は返す言葉が見つからず、ただ^{ぼうぜん}呆然と黙っているしかありませんでした。

それから4年後、その子が血液の病気に^{かか}罹り、一時^{きとく}危篤のような状態になったことがありました。その後病状が回復したのでお見舞いに行った時お母さんが、「この子には、心から生きていて欲しいと思えました」と、笑って話してくださいました。またある時には、「この子がいてくれて、生きるってどういうことなのか、家族って何なのか、答えは見つからないけれど、真剣に考えさせられました」としみじみと言ってみえたのも今でも心に残っています。

もちろん、病気の時には看病に振り回されたり、この子の障害の状態は変わらないけれど、改めて病氣と闘う姿や一生懸命に走り回る様子を見ることによって、それまで気が付かなかつた想いに出会われることがあるのだと感じました。